『大分県地方史』と考古学

―大分県地方史研究会五〇年をふりかえって

後藤宗俊　真野和夫　渋谷忠章
（進行：田中裕介）

はじめに

後藤　考古学から見ると一九五四（昭和二九年）の『大分県地方史』の刊行後では一九七一（昭和四六）年の県文化課の発足が一つの画期。それまでをどう見るか。一九八一（昭和五六）年の大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館の発足に対して地方史がどう対応したか。その後は県文化課の面々が編集に加わっていった時期、これは渋谷君や真野君に話してもらおう。

県文化課発足以前―一九七一年以前

後藤　われわれが顔を出す以前の大分県地方史研究会と考古学との関係というわけだね。それまでの一九五〇～六〇年代に大分県下で考古学をやっていた人たちというのは、まず賀川光夫先生が別府大学にいて、それに富来隆先生、教え子の佐藤暁さんなど大分大学関係者の存在感があり、私が県文化課に入った七〇年ごろは、この両者の関係の調整に気を使ったものだよ。七〇年代以前の賀川先生と大分県地方史研究会との関係は、まだ会員個人として声をかけられて投稿していた段階だな。それは富来先生でも佐藤暁さんでも変わらないと思うけれども、その中で唯一、一九六四（昭和三九）年の『大分県地方史』三四号に、縄文時代遺跡を中心にした考古学特集が組まれた。そのころは川原田洞穴、小池原貝塚など縄文時代の遺跡の調査があいついで行われた時期だ。この特集の契機は聖嶽洞穴の調査だったと聞いている。

そのころは大分市内の新産都建設に伴う調査が行われていたけれど、その成果はまったくといっていいほど『大分県地方史』にはでていない。ほかに一九五四（昭和二九）年の宇佐の虚空蔵寺跡にはじまって宇佐神宮の弥勒寺跡、国東の安国寺

遺跡の調査もすでに終わっている。新産都の大分市野間古墳群とか佐賀関町中の原古墳の調査、最終的には県文化課発足前といえば宇佐市の台の原の一・二次までやっているわけ、大分市御陵古墳の調査もやっている。そういう重要な考古学的調査というものはほとんど『大分県地方史』誌面には出ていない。そういう段階だと思う。

田中　大分県地方史研究会の中で考古学が参加できる部会のような組織はまだなかったわけですね。

後藤　それどころか幹事にも考古学の人はいなかった。当時編集の橋本操六さんは、考古学に対しては無垢でね。でも逆に、それがよかった。全部丸なげで任せてもらえた。いちいち、いやまったく口出ししなかった。そうした点はその時期の地方史研究会の編集部と渡辺澄夫先生も同じでね。渡辺先生の考古学に対するスタンスは後にぐっと変わってくるけれど。そのころまでは考古学が大分県地方史研究会の一分野として組み込まれているという姿ではない。考古学で書いている人たちも、その時代その時代の重要な成果をひっさげて、この中で書いているという姿ではないと思いますね。特にこの時代は大分大学が強かった時代だから、名実ともに大分大学を本拠地とする大分県地方史研究会だったね。

田中　六〇年代までは『大分県地方史』に考古学の成果はあまり反映されていないですが、どういう状況でしたか。

後藤　発掘調査を継続的にやっているのは賀川先生ぐらいで、非常に少ない。

真野　当然調査報告書の発行も非常に少ない。早水台といくつかぐらいかな。

渋谷　入江先生も少しは掘っているけど、報告書をあまりまとめていない。

田中　資料紹介とか論文とかどこに発表されていたのですか。そのころは。

後藤　『考古学雑誌』とかそういう全国誌かな。

田中　地方で発表できる場というのは少なかったのですか。

後藤　報告書だけね。それと市町村史の中に書く。

真野　調査もそんなに無かったしね。

後藤　だってね。ぼくらが住居址一軒を丸ごと完全に掘ったのは、一九七二（昭和四七）年の高居遺跡だよ。

真野　つまり住居址をきれいに掘ったのは、県文化課ができてから。

後藤　あのころは集落遺跡の発掘法なんて知らなかったものね。雄城台遺跡なんて試行錯誤だった。

真野　雄城台はむずかしかった。どこまでが包含層なのか。どこで検出してよいのか。最初は地山がわからなかった。

後藤　あなたたちが来てからやっと掘れるようになった。七〇年前後以前というのはこういう状態じゃなかったかな。

真野　その前に宇佐風土記の丘の調査をしたでしょ。

後藤　あれは県文化課ができてから。僕が奈良国立文化財研究所の研修で古墳の測量法を学んできてから。七〇年代以前は大分県地方史研究会の活動の中では、考古学はしっかり組み込まれていなかった。そのなかで富来先生のグループと、賀川先生のグループの研究成果が寄せられていた段階だな。

県文化課発足以後―一九七一年以後

田中　県文化課が発足以後、考古学の関係者がはじめて委員になったのはいつごろですか。

後藤　僕が初めて『大分県地方史』に書いたのは、一九七四（昭和四九）年の七三号の「大分川下流域における在地首長の成立と発展」。僕が県文化課に入った七一年当初は考古学をやる気はそれほどなくて、地方史研究会にかかわったのは結構遅いよ。委員に入って初めて僕が編集したのもずいぶん後の、「古宮古墳考」を載せた一九八五（昭和六〇）年の一一七号歴史考古学特集だよ。

田中　それ以前は確かにさきほどの三四号を除けば、考古学の特集はないですね。

後藤　僕の次に委員に入ったのは渋谷君だろ。真野君は先哲に来るまでは幹事には入ってないのかね。

真野　会員だけど編集委員ではない。

後藤　僕のかかわったもので言うと、一九八三（昭和五八）年の一〇八号。大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館ができた

直後で、文化庁の広域遺跡村落調査という宇佐歴民の発足を応援するような調査があったときに、「遺跡としての農村の調査」という報告をした。それをもとに一〇八号に「ある〈村落〉考―豊後高田市大曲地区の場合―」を書いた。あれしか書いてないけど、その調査を坪井清足先生とか水野正好さんとかそういう人たちが面白がってくれて、広域水田遺跡調査を本格的に国の補助事業に乗せるちょうどきっかけになった。あの論文を、ああいう当時の文化庁の埋蔵文化財担当の人たちが読んでくれたというのがうれしかったね。

そのあとに僕が編集したのは一一七号、僕は真野君が発掘していた大分市古宮古墳を横目で見ながら、大分君との関係を書いたけれども、同じ号に載った調査研究の中で、今になって重要な意味を持っていると思うのは、讃岐和夫君が報告している大分市古国府羽屋地区の調査（「豊後国府推定地周辺の発掘調査」）だよ。これはちょうどそのころ国府に対する全国的な保護施策が進んできて、大分県でも豊後国府をどうかしないといかんというんで、研究調査をやり始めた。最初は国庫補助事業で豊後国府跡重要遺跡確認調査というのを考えたけれども、これは予算が付かなかった。それで住宅開発に伴う緊急調査がおこなわれた。その遺跡は今になってみると一二世紀から一三世紀の館跡のような遺構が出てきていて、大友氏の別荘があるところとされている花園付近にあたるわけだ。今の中世大友府内町遺跡の前段階の、大友守護所の時代の可能性のある遺跡だったのではないかと思う。それよりもっと前の時代から言えば、豊後国府が上野ヶ丘の台地の上か下かという問題もあった。あのころわれわれは国府が古国府にあったと思っていたけど、豊後国府=府内を上野台地とその南と北の広域な遺跡とすれば、この報告は南のほうの遺跡を包括的に報告したもの。豊府小学校の遺跡それ自体はどうってことないけれど、その後研究が進んでいない重要な地域ではないかと思う。中世大友府内町遺跡はほとんど一五世紀以降でしょ。一三・一四世紀を追跡する可能性はこの地域にあったのかなあと思う。

真野　結局国府関連遺跡はあまりわかっていない。かなり掘っているけどもね。

渋谷　一九七六（昭和五一）年の八四号で、豊後国府研究小特集がでているけれども。

後藤　ぼくらもその号を参考にして豊府小学校建設のときに掘ったよ。「古宮古墳考」を書いた一九八五年に渡辺先生の地方史研究奨励賞をもらった。そのときはじめて渡辺先生が考古学に興味をもってくれてね。あのとき僕は編集委員だったので、内部からはどうかという声があったときに、渡辺先生が非常に強く推してくれた。そのあと渡辺先生の発言で非常に強い印象に残っているのが、一九九一（平成三）年の一四三号で中世城郭特集をだしたときに、会長の最後のころのあいさつで、考古学はがんばっとる、考古学の領域から歴史の分野にどんどん発言している。あんたらががんばらないといかんといって発破かけたことがあるよ。それまでの渡辺先生は、宇佐歴民の村落調査でも最初は消極的だった。

真野　そうそう。

後藤　渡辺先生は典型的な文献学者で、荘園研究でも文献派の中心中の中心だったけれども、晩年は反対にこんなに中世の遺跡がでてくるのかというスタンスだった。

真野　その理由は宇佐歴民の田染荘調査以来のフィールドワークに重点を置いた調査の成果が上がっていったということだろうか。

後藤　地方史研究会のメンバーの中でも渡辺先生が一番理解があったような気がする。その分野の考古学の動きをいつも視野に置いていたような感じだった。

真野　結局六郷満山にしても国東の荘園群にしても、文献からの研究はもう頭打ちだった。打開できるのはフィールドワークしかないというところだった。

後藤　渡辺先生はそのあたりがわかっていたなと思う。もうひとつ渡辺先生ですごいなあと思うところは、緒方三郎惟義の研究で飯沼賢司さんが馬のこと言い出しただろ。すると渡辺先生は、僕に言ったよ。緒方三郎の研究で大きな取り残しをしたのだ。あれに馬だということを書かなかったと。どうやって大宰府までせめていったか、なぜあれだけ強かったか。その原因が騎馬軍団だということが視野になかったな。と亡くなる直前だったけどね。そういう発言ができるのはすごいなあと

思ったね。だから地方史研究奨励賞をもらった時は、歴史考古学の存在をはじめて認めてもらったと、僕はそんな気になった。今度の特集で、渡辺先生がそういうスタンスを持っていたことは顕彰すべきだ。

真野　最初は渡辺先生にとって考古学というのはほんの補助学だったのが、そうじゃなくなってきたわけね。旧石器時代とか縄文時代なら別だけど、古代史や中世史にどんどん踏み込んでくるような発掘調査が多くなってきたからね。そのあと一九九〇（平成二）年の一三七号の大分県の中・近世墳墓特集は渋谷さんの編集ですね。これは発掘事例が増えてきて一度まとめとこうかというところかな。

渋谷　そうそうそれまでの大分県の考古学というのは、別府大学がやった旧石器縄文研究が中心だった。ところが開発に伴って中近世の墓の調査が多くなり、ひとつ中世の墓をまとめてみようか、特に火葬墓と土葬墓に時代性・地域性があるのか、という関心からこれを組んだ。

後藤　保存状態のいい中世墳墓を次々と調査したからね、このころは。三光村佐知遺跡とか日田宮原遺跡とかね。

渋谷　大分自動車道とか宇佐バイパスなどの、いままで考古学の対象じゃなかった土地に道が通って多く出てきたのですよ。またもともと中世の墓も考古学の対象ではなかった。開発があったから発掘ができた。田中裕介君の女狐近世墓の調査は、かつてだったら絶対発掘なんてありえない。道路が引っかかったから発掘があったんですよ。

後藤　そのあとが一四三号の中世城郭特集だね。

渋谷　その特集を組んだ理由は忘れたけど、まだ国庫補助事業の中世城館等発掘調査事業に入る前だけれど、このころは玖珠町切株山城址の調査があって、その当時は県内には中世城郭の指定史跡がなかったころ。それと高崎山城址にいたる遊歩道を作るのでその取り扱いが大きな問題になっていた。それと城館というのは地方史やる人が一番よろこぶよね。御らが村の何々城という風に。このあとも中・近世城郭特集のその二が一九九五（平成七）の一五七号。このあとすぐに大分県の中世城館の調査が九ヵ年にわたって行われる。それが平成一五年度で終わったけれども、そのきっかけになったと思う。

後藤　大友館跡のときだったかね。大分県地方史研究会として遺跡保存のアピールをだしたのは。あれが初めてではないかね。（一九九九（平成十一）年一七四号）

最近の一〇年―一九九〇年代後半から

田中　渋谷さん編集の考古の特集の後は、編集の中に私や渋谷さんが入っていても、特別考古学だけの特集というわけではなくなりましたよね。そのころから、近世史の特集にも考古の人が書いたり、別に特集を立てなくても分野によっては最初から考古が予定されるというか、声がかかったりというか、この一〇年間ぐらいはそうなっています。

渋谷　でも考古学をやっている人で大分県地方史研究会に入っている人が少ない。だから原稿が頼みづらい。

後藤　大分県考古学会が一九八三年にできている。それがひとつの原因だ。

渋谷　だからそれも意識して中世というのに注目した。「おおいた考古」ではそういう分野が少ないから。

後藤　地方史研究会の会員を意識して、そちらよりの情報提供ができる遺跡を紹介できたかな。

田中　そういう意味では、歴史考古学的な内容に集中している。だから逆に昔のほうが古い時代の論文が多い。

後藤　官衙の遺跡がどんどん出だしたのはいつからかな。大分市地蔵原遺跡はまだまだ走りだった。

田中　八〇年代の初めでしょ。地蔵原遺跡の保存問題がきっかけで大分県考古学会ができたと聞いています。

後藤　そのころからが歴史考古学の情報が急速に増えてくる。

田中　たしか九〇年ごろに大分県考古学会で、吉田寛君が大分県の古代官衙じゃないかという遺跡を集成したときには、まだはっきりした明確な建物遺構がなかった。なんとなく一般の集落ではないなという程度。その直後ですよ、本格的にこれは間違いないという遺跡がどんどん出てきた。

後藤　久末京徳遺跡とか会下遺跡とか、久住町古代遺跡群とか久土遺跡とかがどんどん出だした。

中世大友府内遺跡に関して、田中君が古代道路のことを書いた文章（『考古学』七三号）に、[illegible]

田中　大分県地方史研究には歴史地理の分野をやる人がいませんね。

後藤　西別府元日先生が本格的だけれどね。西九州のほうが盛んだし、考古学も結構道路遺構を出しているからね。

最近の調査から―中世大友府内町跡の調査

後藤　中世大友府内遺跡関係で言えば、文献のほうが弱いと思うな。歴史考古学があれだけ情報を出している中で、ほんとに文献のほうからの大友研究の深まりというのがもうひとつだね。実際の遺跡と照合していく中で見合うほどの成果がないものね。大友府内については家臣団の集住、それから府内近郊の大友家臣団の居所とかはどうなのか。問題が中心に収斂してきて一度拡散しないといけないところがある。川の向こうはどうかとか。港側はどうかとか。家臣団は府内町におるのかい。

田中　かなりいると思います、文献と遺構の双方から見て。少なくとも屋敷はあります。そこに常住しているのかどうかは別として。

後藤　しかし織豊系の都市とは違う。まことに牧歌的な状態。町並みに武家がいたのかどうか。そのあたりは歴史のほうの研究者はどうとらえているのかね。

真野　三重野誠君の考えでは、大友館が整備されてすぐに、宗麟は義統をつれて臼杵に移っている。だから家臣団は臼杵に行くのではないですか。そういう話でした。いままではそうは思われていなかった。少なくとも宗麟が家督を譲ってからは府内に義統が残って宗麟だけ臼杵にいっていると思われていたけれど、実は早い段階から義統も臼杵にいっている。という話でしたよ。

田中　一五六〇年代はじめからはほとんど府内にいないですよ。

真野　だから若いときしか府内にいなかったので、家臣団の配置とか整備とかそういうのが遅れていたのでは。

後藤　僕もそう思うな。だからあんなにもろかったのではないかな。

真野　あの強力な戦国大名の家臣団掌握術とは異なっている。

渋谷　直飼いの家臣というのがいなかったのか。

真野　中世府内の中に有力家臣団が住む大きな館はないの。

田中　明確な遺構として出てくるのは、館の前の半丁四方とか、何箇所かあるんですよ。町屋ではないなというところがあるんですよ。遺構の密度は薄いんだけど区画の溝はきっちりあるといった。

渋谷　だけど大友の家臣団といえばもっと居るというような感じがあって、そういうのがない。町屋ばかりだ。

後藤　飯沼賢司さんは中世大友府内町は城下町ではなくて、商人町じゃないかと。

真野　博多のような。

後藤　むしろ逆に貿易拠点を抑えるために、大友館が下に降りてきたという把握のほうがよいと。それに関して、伝世した陶磁器と出土した陶磁器、府内町で出てくる陶磁器は使われて捨てられているものなのか。

田中　種類によって違いますが、

真野　茶陶もありますからね。

後藤　大友氏が滅びたときにコレクションに近いものを持っていたとしたら、伝世して今日に伝わるのかな。

田中　そういうものもあるでしょうけれどねえ。

真野　大部分は日常品だと思いますが。今で言えばかなり高価なものも使っていたと。ところがほんとのいいもの、中国のいいものというのは少ないですよ。

後藤　博多でよくあるでしょ。ストックしたような出土状態は大友府内ではないの。商品を蓄えていたような。

田中　出ていないですね。

真野　博多の例は一三・一四世紀ぐらいの例ですから。宗麟の時代にはそういうものが大量に入らない時代ですから。だから東南アジアや華南などの南のほうに行くわけでしょ。江戸時代になったら南のものが入らなくなって珍品になるけれども。

後藤　中世府内は大友の国際貿易都市なのかどうか。大友氏のコレクションつまり物の集まりという要素が多いのか、貿易商品としての陶磁器を扱ったのか。それはどう考えている。

真野　貿易商品もあるだろね。全部が全部ではないでしょうけど。

後藤　そういう点では堺と変わらん貿易都市なのか。

真野　宗麟が中心になってその経営をやっていたかは別。そこが問題だと思うのですよ。それほど宗麟は中心になっていないのじゃないですか。商人の活動を奨励はしたかもしれないけれど。

後藤　大内氏とも違う。どうなのだろうか

田中　貿易船を何本か出していますが。東南アジアに。

真野　その辺が問題だろうね。行っているんだろうけど、直接行ってるかどうか。

田中　直接じゃなくても商人が肩代わりしていっている。

真野　種子島や琉球に集積していたものを、運んでくるだけかもしれない。おそらくそれが多かったと思うよ。仲介貿易というか。自分たちであっちまでいって、リスクを背負うよりは、集めさせておってほかのものと代える。その辺は文献の人もよくわからんのかな。

後藤　大友について言えば、遺跡から見た面と物から見た面と両方。物の流通という面から見た大友の貿易に対する姿勢とか。考古学の成果をしっかり見たうえでの文献側からの発言・アプローチ、それから大友の城下町というか、大友館周辺のあるいはそれを取り巻く家臣団の分布とか、集住形態とかとの関連、たとえば家臣団の集住はあまりしていないな、いま出ているのは大部分町屋だろう。名護屋城の陣屋跡みたいなものはもちろんななかろうし。少なくとも掘割で囲まれた館跡みたいなものがあちこちで出るという状況でもないだろ。ところで大分市下郡遺跡の中世遺構はなんなの。

田中　城館の周りに堀をめぐらした小型の屋敷地が連なる遺跡ですね。そのまわりに集落がある。下郡だけが特別ではなく、

そういう場所はいくらでもある。

後藤　大友館跡と中世大友府内町という町との間に、家臣団を想定した屋敷跡群が想定されないのかどうか、あったら違った景色でしょう中世府内は。うなぎの寝床のような家にはならないでしょう。武家屋敷が想定できるのか。

田中　御所小路周辺などが武家屋敷ですよ。ぜんぜん町屋ではない。それと林小路町は普通の町屋ではない。遺物の出土量は逆に少ないですよ。

後藤　それは道路に面してならんでいるような状況なの。

田中　いわゆる南北の縦通りではなくて東西の横の細い通りです。道幅三ないし四mほどです。そういう通りに面して逆に武家の屋敷地がある

渋谷　しかしどっちにしても知れているわな。

後藤　そう武家といっても江戸時代でいえば与力から同心クラス。長屋に住むクラス。大友の家臣団の中枢、重臣クラスの屋敷が周辺にあるのかないのか。それが大友の運命と関わっているんだと思うがね。

渋谷　いま一番使われているのが府内古図と宣教師の文献ぐらいで、もっと日本の文献の中から出てこないのかと思うけどね。

田中　具体的なことがわかる文献はほとんどないようです。

後藤　なければないで、あの時期の日本の守護大名なり戦国大名なりの城館と屋敷の関係とかその辺をトータルにやる人がいないのかね。だから大友ばかりみていてもだめなわけで。

渋谷　発掘が続いていけば、どこかでいろんなものにあたるだろうけども。

真野　現段階では考古のほうが資料をもっているね。

後藤　考古学は一五・一六世紀の情報が多ければ多いほど、歴史の暦と無関係にものが言えないよね。とんでもない間違いになるからね。だから土器をやる人たちは一〇年刻みぐらいでいわないといけないと思うね。

後藤　考古学の側から言えば、宇佐国東の研究は県立歴史博物館にまかせるとして、もうひとつは古代官衙が遺跡として発見される可能性があり、古代のほうで文献にがんばれといっても新しい材料は木簡ぐらいしかないから、そんなひっくり返ることは少ない。しかし遺跡から言うことが多い。

渋谷　大友とか歴史考古とかは盛んだけど、それ以前の時代の考古学はどうなっていくの。賀川先生がいたころ別府大学がやっていた縄文研究とか。今後の大学は。

後藤　大分県地方史研究に考古学がどう噛んでいくか、今までの経過から見れば、わりと地方史の会員を意識した歴史考古学の企画でやって来た。これからもそれで行くのか。考古学プロパーは大分県考古学会で継続するから、これからどういう方向でいくか。

渋谷　今後の大分県の考古学界の見通しとして、発掘をやる大学としての別府大学は今後どういう方向にいくのか。研究機関としてどうやっていくのか。

後藤　中世大友府内町遺跡の場合でも、よく見ていたら県が調査したり市がしたり、大分市歴史資料館は独自の方法論と問題意識をもって、行政がそのままやれない部分のアプローチがあるだろうし、たぶん同様に大学にも独自の役割があるだろうね、方法論とか。大学と地元の人との協力関係をどうするかとかね。今うちのほうはかなりそれを意識して、地域に提供できる仕事に傾斜している。文科省は面白いことにそういうものに金をだす。自治体と連携した学術研究というのは地方の大学のひとつの育成要素であると。そういう点では比較的行政でもつきにくい予算がついてくる。それと予算でない人的資源で稼いでいるという点がものすごくある。もう少し働きようがあると思っているんだけどね。ただ発掘調査を試みて発言するというのは、大学の調査は規模が知れているからね。おいしいところばっかり発掘するのだったら別だけれども、それをやらないということを考えている限り、考古学科でなくて文化財学科だというひとつの縛りがある。掘りたいところを掘ら

ないということがあるわけだ。だから文化財保護に役立つ考古学研究という言い方からすれば、役立てられるところではどんどんやっていこうという意志はあってね。古墳の測量調査をやっているのはそういう意識でやっている。その測量図を完成させるにあたって必要な最小限の調査、そういったものをやっていくだけでものすごく新しい情報がでてくる。そしてそれを行政すなわち自治体に還元できる。別府大学はとにかく地域のニーズに対応しながら研究テーマを深めていくというか、よかれあしかれそれしかない。

田中　最後にひと言ずつお願いします。

真野　今大分県の地方史研究は危機的状況にある。その中で考古学というのは組織としてしっかりしているわけじゃないですか。そこがどう変わっていくかは今後の地方史研究の命運をにぎっている。という気もするんですね。

後藤　郷土史研究から地方史研究に進めた渡辺澄夫先生の根本にかえって、大分県地方史研究会のなかでの考古学の役割というのが、ここで論じるテーマだけど。

渋谷　中世城館の調査を終えてみて、大分の城館のうち一四、五ぐらいが国指定の候補にはいる。ほかの県では多くて四、五箇所なのに、大分県は一四、五箇所。それを今後国指定に目指していくということになると、やはり地元の歴史の人たちと地元の行政とを含めて取り組んでいくとか。あと県指定候補が何十かあるから、今後ここに入ってくる会員の人たちを含めていろんな情報をいれて、また『大分県地方史』に出していければね。中世城館だけでもね。

後藤　最後に地方史研究と考古学の課題でひとつの大きな問題は市町村合併だよ。市町村合併に伴う埋蔵文化財そのものの調査員の問題ももちろんあるかもしれないけれども、合併にともなって施設の統廃合みたいなものが起こらないのかね。市町村合併というのは、たとえば今度の大分市の合併なんかは海部郡が消えるんだよね。日田なんかは日田郡だからまだいいけど、直入も竹田市になってしまったら直入郡はなくなってしまう。そのときに旧郡をどう残すのかね。なんかの形で。

（二〇〇四・五・五　先哲史料館にて　後藤宗俊氏をかこんで、真野和夫、渋谷忠章、田中裕介を聞き役に行ったものである。）